

オンラインコーチング第2回 強化の原理はほめること

水泳指導者の水野加寿さんは、「ほめること」は学習心理学の基本原理に則っている大事な行為であると力説しています。

水野さんによれば、学習には3つの基本原則があると言います。

学習の3つの基本原則

1 強化の原理

2 接近の原理

3 繰り返しの原理

ここで「1強化の原理」では、「ほめること」がもっとも大事だと指摘しています。そして次のようにこのことを説明しています。

犬にただ「お手」と呼びかける(＝刺激を与える)ことをしても、仮にそれを何百回繰り返しても、足をあげる(＝反応する)ようにはならず、足を上げようとするためには、「エサ」を与えなければならない。この場合、「エサ」は、ある刺激に対して、反応が起こるようになることを促進したことになる。

このように、「刺激と反応との結びつきを強める働き」を強化と言い、強化は、学習一般が成立する上で非常に重要な原理である。例えば、「梅干し」と聞いて「唾液が出る」ようになる際にも、その強化が働いている。そこでは、「実際に梅干しを食べる。このように、刺激と反応との結びつきを強める働きを強化と言います。

そして水野さんは「強化の原理」の本質は、「ほめること」にあると言います。彼は、次のように説明しています。

通常、私たち指導者は、子どもに、これから行う動作について説明し、その後、子どもがその説明で感じた動作をやってみます。しかし、この時点では「刺激」と「反応」が結びつかないことが多いのです。つまり、指導者の説明が子ども正しく伝わっていないということです。子どもが行っている動作は、子ども自身が説明を聞いて、あるいは見て感じたままを動作として表現しているに過ぎないのです。

従って、指導者が意図的に子どもの動作をより目的に近づけるためには、「説明という刺激」をもっとわかりやすく、具体的に行うことが大事なのです。

さて、その説明の意図するところの反応(＝正しい動作)に向かって、子どもが一生懸命になれる学習意欲の「強化」が必要となってくるわけです。このとき指導者は、これから行う練習の動作説明をするが、今までにしたことのない動作を言葉で説明されても子どもの頭の中では、その動作が形にならず、イメージができないのです。とにかく、指導者が「あんな変な格好」をしていたので、変だなあと思いつつも「変な格好」で動作をする以外にやりようがないのです。

このとき、「あんな変な格好」で動作してみたら、指導者から次のように言われたとします。

- A 何をやっているんだ！このバカ野郎（しっ責）
- B（何も言わない）（無視）
- C よし、それで良い(しぶしぶの肯定)
- D 良くできたねえ。でもねえ、こうするともっとよくなるよ。(ほめて、改善の指示)

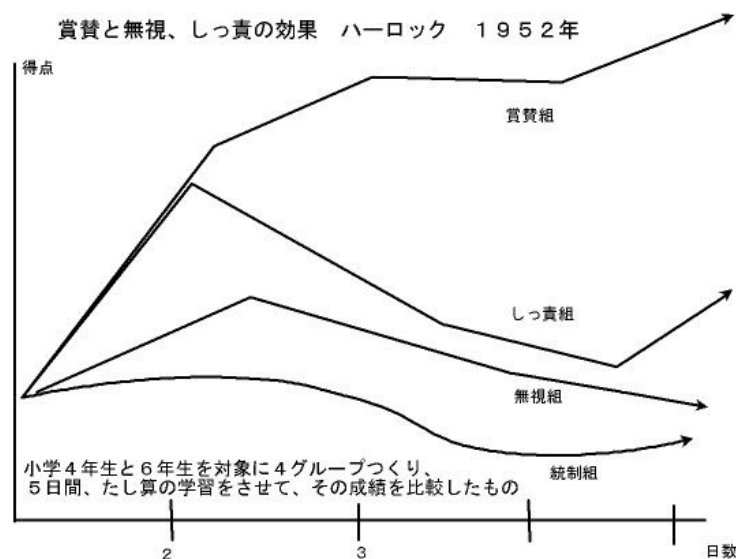
と言われたとします。

すると、D のアドバイスを受けた子どもの上達は、他の子どもよりも早く、以前にもまして積極的に練習するようになるということを指摘しています。

私(安倍)が思うに、これは子どもだけでなく大人の学習者にも当てはまることだと思います。(精神分析を創設したフロイトは、このような人間は快を求めて生きるという行動の根本原則を「快楽原則 pleasure principle」(=ego)と命名しました)

この快を求める行動原則は、学習者だけでなく人間生活一般にも言えることです。大人だって、何かを習得するとき、指導者から承認されて、はげましがが必要です。誰だって「けなされ、おとしめられ、しっ責され、侮辱されると、ますます頑張る」と言う人はいませんね。ある程度の我慢ができる大人だってそうですから、ましてや子どもは、言うまでもありませんね。

しかし**実際は「ほめる」ということは、「しかる」ことよりも難しいですね。「ほめる」のが難しいのは、指導者にとって「努力」を要するからでしょう。「しかる」ことは、感情ですぐにできます。だからずっと叱りっぱなしでいることも可能です。「ほめる」ためには、学習者の行動をじっと観察していなければなりません。一人ひとりの出来ている点(これが異なることが多い)を探し出して的確にほめなければなりませんから。**



今回は「ほめる言葉」について、ある本に具体的に書いてありましたので、それを紹介します。